

【報告】

聖隷クリストファー大学看護学部における 国際交流事業の歴史的経緯

— 交流協定校との協定締結から現在まで (2004 - 2017) —

成松 美枝 渥美 陽子 井上 菜穂美 小出 扶美子
炭谷 正太郎 鶴田 恵子 仲村 秀子

聖隷クリストファー大学 グローバル教育推進センター運営会議 看護学部構成員

Developing International Exchange Programs for Nursing Students at Seirei Christopher University (2004-2017)

Mie Narimatsu, Yoko Atsumi, Naomi Inoue, Fumiko Koide
Shotaro Sumitani, Keiko Tsuruta, Hideko Nakamura

Nursing Members of the International Exchange Committee
at Seirei Christopher University

《抄録》

本稿では、本学看護学部による国際交流事業の歴史を振り返り、現在の課題について整理するために、これまで国際交流協定を結んだ大学・専門職養成機関との協定締結までの経緯と、その後の交流事業の実績と現状を検討した。看護学部は、2004年に本学が中国の第三軍医大学との間で初めて交流協定を締結してから13年間に、ナンヤン理工学院、サミュエルメリット大学、カトリック・サンジ大学の4校に協定校を増やし、総じて学生208名と教職員101名を研修・引率・研究交流の目的で派遣し、協定校からも学生171名と教職員102名を受け入れてきた。今後の看護学部の課題としては、1) 感染対策としての予防接種の実施の必要性と、事故発生時の引率者の対応等の危機管理の問題、2) 看護研修の単位認定や研修の受け入れ時期の問題等のカリキュラムの問題、3) 受け入れの際の研修施設への謝礼やもてなしの経費の予算化等、組織上の問題が示唆される。

《キーワード》

グローバル化、国際交流事業、交流協定校、交流協定締結

I. はじめに

社会の多様な場面でグローバル化が進む中、大学は教育内容と環境の国際化を徹底的に進め、世界で活躍できるグローバルリーダーを育成すること、グローバルな視野を持って地域社会の活性化を担う人材を育成することなど、大学の特色・方針や教育研究分野、学生などの多様化を踏まえた効果的な取り組みを進めることが必要であるとされている（文部科学省、2013）。

聖隷クリストファー大学看護学部は、こうした国によるグローバル化に対応した教育環境づくりへの要請と提言を踏まえて、既に2000年代より海外の4大学・専門職養成機関と国際交流協定を締結させてきた。協定締結を通して、本学が協定校との間で互いの教育内容と方法を学ぶことで見識を深め、高等教育の技術及び専門的知識の共有を可能とする教育的交流プログラムを実施することが目標とされた。

本稿では、本学看護学部の国際交流事業の歴史を振り返り、現在の課題について整理するために、これまで交流協定を結んだ学校との間の協定締結までの経緯とその後の交流事業の実績と現状を検討する。その上で、本学の重点課題とされる「教育の国際化」にどのように取り組んでいけばよいのか、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

次項以降、() はグローバル教育推進委員会センター運営会議での議事録または記録の作成年度を示す。

II. 看護学部の国際交流協定の歴史的経緯

1. 交流協定以前（契約による学生派遣）

看護学部は、現在の交流協定校と交流活動を開始する以前にも、アメリカ合衆国に在る2大

学で学生の海外研修活動を実施していた。1校目は2001年度から2004年度まで4回に亘って学生研修を実施した、ワシントン州シアトル市に在るシアトル大学（Seattle University）である。2校目は、2005年度から2012年度の7度に亘って学生を派遣したネブラスカ州リンカーン市に在るネブラスカウェスリアン大学（Nebraska Wesleyan University）である。これら2大学との交流活動は、シアトル大学についてはGlobal Education Service 会社を介して一年度毎に契約を結ぶものであったが、ネブラスカウェスリアン大学は大学の国際教育センターがコーディネーターを務める契約によるもので、いずれも大学間交流協定は結んでいなかった（2004、2017i）。

2. 交流校との協定締結までの経緯

本学と現在交流協定を結んでいる学校は、協定を締結した年代順に挙げると、2004年度締結の第三軍医大学（Third Military Medical University；以下、TMMU、中国）、2006年度締結のナンヤン理工学院（Nanyang Polytechnic；以下、NYP、シンガポール国、2013年度締結のサミュエルメリット大学（Samuel Merritt University；以下、SMU、アメリカ合衆国）、2016年度締結のカトリック・サンジ大学（韓国）の4大学である。

本節では交流協定の締結後、既に看護学部との交流活動を開始及び継続している、TMMU、NYP、SMUの3校との交流締結までの経緯を振り返る。

1) 2004年のTMMUとの締結まで

看護学部のTMMUとの交流活動は、看護学部の中野照代教授と顧寿智助教授が、基礎看護学分野での共同研究を行うために、2002年3月8日～3月19日の間に中国・重慶市に在

る TMMU と西南病院を訪問したときに始まる (2006)。その時中野教授らは、その後の TMMU での学生研修の可能性も視野に入れ、大学の施設の視察も行っている。同年 3 月 28 日には TMMU から慶大君教授が本学に来学し、長谷川了学園理事長、堀口路加事務局長、深瀬須賀子学長、鈴木恵理子学部長、中野照代教授、顧寿智助教授の出席の下に歓迎夕食会が開催された。

その後早くも 2002 年 8 月 1 日～14 日には第 1 回目の中国研修が実施され、看護学部学生 11 名が参加している。翌年、2003 年 9 月 30 日～10 月 3 日には第三軍医大学から洪先本副学長、朱京慈看護学部長、蘇炳銀基礎医学部副部长が来学した。本学の深瀬須賀子学長、看護学部国際交流委員長中野照代教授らと、両大学の交流協定について話し合いが行われ、翌年の交流協定調印に向けて準備が進められることになった。話し合いでは、両大学の看護学部の交流の目的として以下の 3 点が挙げられた (2003)。

- ①中国におけるヘルスケアシステムを学び、日本との違いを考え、国際的な視野で保健・福祉・看護・医療を見つめることのできる人材を育てること。
- ②中国の生活や文化に直接触れることで、日本の文化を見つめなおし、人間・社会・環境への理解を深めること。
- ③英語もしくは中国語を使い、中国の人とのコミュニケーションに挑戦すること。

翌年 2004 年 9 月 20 日～27 日には、本学から TMMU に第 3 回目の教員派遣が行われ、9 月 21 日、本学と TMMU との間で交流協定調印式が実施され、交流協定を締結した。調印式では、吳灿第三軍医大学長と深瀬須賀子学長が協定書にサインし、本大学の看護学部・社会福祉学部・リハビリテーション各学部から学生 1 名ずつが

参列した。

こうして交流協定が締結し、2005 年 1 月には西南病院の魏静蓉副主任看護師が視察・交流のため、喻啓玲講師と第三軍医大学の周明芳看護学部講師、載琴第看護学部助手が研修のために本学に来学した (聖隷クリストファー大学、2006)。

2) 2006 年の NYP との締結まで

本学と NYP との交流は、2004 年 8 月 16 日～19 日に、リハビリテーション学部作業療法学専攻教員である宮前珠子教授ら 4 名が、NYP ヘルスサイエンス学部を研究視察のために訪問した時から始まる (2005、2017c)。2005 年 9 月には、本学の全学部と NYP ヘルスサイエンス学部の間で交流を開始することを目的に、中野照代看護学部長が小川恵子リハビリテーション学部長、宮前珠子作業療法学専攻長、吉川卓司理学療法学専攻長と共に、交流協定締結に向けた打ち合わせを行うため、NYP を訪問した。同年 11 月 21 日～25 日には NYP から、Chen Mun Lau ヘルスサイエンス学部副学部長、Lim Hua Beng 作業療法学専攻長、Roseling Ang 看護学科主事、Cynthia Hosey 看護学科講師と学生 (理学療法 10 名、看護 5 名) が来学し、再度交流締結に向けた打ち合わせを行った。

翌年の 2006 年 4 月 25 日には本学と NYP との交流協定調印式が NYP にて行われ、本学からは深瀬須賀子学長、小川恵子リハビリテーション学部長、藤本栄子看護学研究科長、今西野百合総務部長、川野千佳国際交流センター職員が出席した。調印式では、以下の内容からなる「交流協定に関する覚書」に両校学長が署名した。

- (1) 協定の目的 : NYP と聖隷クリストファー大学は、両教育機関において、健康科学分野専門職の養成及び能力開発の促進を目的として、相互の利益に基づき協力し連携するため、

交流協定を取り交わす。

(2) 協定の範囲：両教育機関は、以下の4つの事項について協力するものとする。

- ①学生の交流、②NYP 卒業生への進学機会の提供、③教員の交流と専門知識の共有、④共同研究およびプロジェクトの実施。

(3) 聖隷クリストファー大学の役割：

- ①聖隷クリストファー大学は、海外臨床プログラムに参加している NYP 学生が、聖隷の関連医療施設において臨床経験を得られるよう努める。
- ②聖隷クリストファー大学は、NYP と協力し、教員の交流を図り、共通の関心分野の共有を促進する。聖隷クリストファー大学の教員は、客員教員として講義のために NYP に招聘されることがある。
- ③聖隷クリストファー大学は、NYP との同意の下で共同研究およびプロジェクトを促進する。

(4) NYP の役割：

- ①NYP は、聖隷クリストファー大学と協力し、学生の交流を促進する。
- ②NYP は、聖隷クリストファー大学と協力し、教員の交流を図り、共通の関心分野の共有を促進する。NYP 教員は、客員教員として講義のために聖隷クリストファー大学に招聘することがある。
- ③NYP は、聖隷クリストファー大学との合意の下で共同研究およびプロジェクトを促進する。

(5) 履行指針

- ①協定の有効期間は、協定締結の日から3年間とし、以後は両教育機関において協定内容を精査の上、互いの合意に基づき延長することができるものとする（以下、省略）。このように調印式では、両校の間で学生と教

員の教育と研究の協力・交流を図ること、3年ごとの更新を行うとする協定が成立した（2005、2017c）。

3) 2013年 SMU との締結まで

SMU と本学が交流協定を結ぶ契機となったのは、2011年11月15日、SMU 看護学部のプログラムディレクターである、Dr. Fusae Kondo Abbott（以下、Dr. Kondo）が本学に招かれ、交流協定に関する意見交換会を設けたことに始まる（2011）。

同会では始めに小島操子学長が、「現在本学はシンガポールと中国に交流締結校があるが、北米の大学とも交流協定を締結したい。」という意向を表明した。そして「SMU とは私だけでなく、他の教員とのご縁もあり、ぜひ交流を進めていきたい」と訴えた。

小島学長の希望に対して Dr. Kondo も、「学長および副学長は交流を支援する考えがある。学内で日本独自の技術など教員の中には興味を示す人はいる。例えば OT/PT 分野で日本独特のアプローチがあれば、アメリカの教員にも魅力的に映るのではないかと、SMU にも学長と教員らにリハビリテーション学部を含めた本学との交流の希望があるという意向が示された。その上で Dr. Kondo は、SMU には国際交流センターの様な部署がないため SMU 側の窓口を当面自分が務めると申し出た。

この Dr. Kondo の申し出に対し小島学長は、「当面 Dr. Kondo の負担が大きいと思うが、よろしくお願ひしたい」と快諾し、両大学の交流協定締結への一歩が踏み出された。

2012年には、小島操子学長、藤本栄子看護学部長、大城昌平理学療法学科長、新宮尚人作業療法学科長が SMU を訪問して Sharon Diaz 学長等と面会し、交流協定に向けて準備を進めた。翌年2013年11月5日には SMU から

学長を含む6名が来学し、両大学は本学にて調印式を行い、交流協定を締結した。

交流協定の締結にあたり両大学の間で作成された覚書の前文では、以下のような交流協定の目的が記載された(2013)。

① SMU 及び聖隷クリストファー大学の両校は、学生と教員が互いの教育方法を学ぶことで見識を高めることができると信じ、そのような成果を目的として互いに学生および教員を派遣する。

② 両校は学生、教員および職員が互いに訪問し見学できる教育的交流プログラムの実施や専門知識の共有、プロジェクトの協働及び相手校における継続教育に対する興味・関心の醸成を促進する。

協定の有効期間は、覚書の冒頭に記載した日付から3年間とされた。

Ⅲ. 現状：協定校との締結後の交流事業

本節では、交流協定の締結後に各協定校と本学看護学部の間で互いに派遣した学生数と教職員数の推移を検討する。その上で、2016年度までに各協定校との間で、学生が実施した研修の内容を述べる。

1. TMMU との交流事業

1) 学生及び教職員の派遣者数の推移

2004年9月の交流協定締結後、TMMU と本学との間の交流活動は、参加希望者が少数であったために本学部生の派遣が中止された2014年度以外は毎年度実施されてきた。両校が互いに派遣した学生と教職員数の推移は表1の通りである。

表1. 本学と TMMU の学生・教職員派遣数 (名)

年度	本学から TMMU への派遣			TMMU から 本学への派遣	
	学生研修	引率	教職員派遣	学生研修	教職員派遣
2004	20	3	3	0	4
2005	—	—	1	0	7
2006	20	2	4	0	11
2007	—	—	3	8	7
2008	5	1	5	0	3
2009	—	—	0	0	5
2010	6	1	7	0	5
2011	—	—	2	0	2
2012	7	1	2	0	0
2013	—	—	—	0	0
2014	中止	中止	0	0	2
2015	—	—	1	0	5
2016	3	1	1	0	2
合計	61	9	29	8	53

国際交流センター運営会議 (2017b) : 第三軍医大学と聖隷クリストファー大学との交流実績、
 2017年2月20日. をもとに作成

引率は学生研修の引率を担当した教職員数を示し、教職員派遣は本人の研修のために派遣された教職員数を示す。学生研修は看護学部生のみ参加者数を示すが、引率と教職員派遣は他学部の教員数も含む。

本学から第三軍医大学への学生研修の派遣は、隔年実施である。

2) 本学部生の TMMU での研修内容

本学部生の TMMU での学生研修について、2016 年度の主要な内容は以下の通りである (2017e)。

本学部生は、TMMU にて「基礎看護学」「英語」の講義を受講した。また、西南医院 (第 1 附属病院)、新橋病院 (第 2 附属病院)、大坪病院 (第 3 附属病院) においてシャドーイングを含めた施設見学を実施した。

スケジュール

1 日目	北京国際空港着 北京市内見学
2 日目	文化施設・世界遺産の見学
3 日目	TMMU オリエンテーション、キャンパスツアー (人体標本を含む解剖学教室など)、高齢者ケアセンター見学、歓迎会・学生交流会
4 日目	施設見学: 西南医院 (第 1 附属病院)
5 日目	講義: 「基礎看護学」, 「英語」 施設見学: 地域病院
6 日目	施設見学: 新橋病院 (第 2 附属病院)、大坪病院 (第 3 附属病院)
7 日目	重慶市内見学
8 日目	上海市内見学
9 日目	上海国際空港発

2. NYP との交流事業

1) 学生及び教職員の派遣者数の推移

2006 年 4 月の交流協定の締結後、NYP と本学の学生の研修派遣は毎年度実施されてきた。両校が互いに派遣した学生と教職員数の推移は、表 2 の通りである。

2) 2016 年度の学生研修の内容

(1) 本学部生の NYP での研修内容

本学部生が NYP を拠点にシンガポールで実施した主要な研修内容は、以下の通りである (2017e)。

本学部生は、NYP で「シンガポールの社会制度」、「シンガポールの医療制度」、「シンガポールの健康増進政策」、「シンガポールの経済情勢」の講義を受講した。また、タクトセン総合病院、障がい者就労支援施設において、シャドーイング及び施設見学を実施した。

スケジュール

1 日目	チャンギ国際空港着
2 日目	ホストファミリーと過ごす
3 日目	NYP: オリエンテーション 講義: 「シンガポールの社会制度」、 歓迎昼食会、キャンパスツアー
4 日目	講義: 「シンガポールの医療制度」、 施設見学: タントクセン総合病院
5 日目	施設見学: 障がい者就労支援施設、 講義: 「シンガポールの健康増進政策」
6 日目	施設見学: 障がい者就労支援施設、 講義: 「シンガポールの経済情勢」
7 日目	看護学部研修、お別れパーティー
8 日目	博物館見学、午後: フリータイム
9 日目	チャンギ国際空港発

(2) 本学部生の NYP での国際看護実習の内容

本学部の 4 年次生は、毎年度 9 月に NYP を拠点にした、2 週間の国際看護実習を行っている。毎年度 2 名が参加しているが、実習内容は主にシンガポール国内 2 番目の規模を持つ総合病院での病院実習である。2 週間の実習には、ポリクリニック (一般診療所) やヘルスプロモーションボード (健康増進協会) の見学、小学校での健康診断の見学、訪問看護のシャドーイングも

表 2. 本学と NYP の学生・教職員派遣数 (名)

年度	本学から NYP への派遣			NYP から本学への派遣		
	学生研修・ 看護実習	引率	教職員派遣	学生研修・ 看護実習	引率	教職員派遣
2006	8	1	5	13 2	7 2	1
2007	9	1	1	— 2	0	0
2008	11	2	5	11 2	2	0
2009	8 2	2	4	13 2	2	0
2010	5 —	1	3	14 2	2	0
2011	5 2	1	2	10 —	2	0
2012	10 2	2	2	10 2	2	0
2013	6 2	2	0	10 2	2	4
2014	12 2	2	1	2 2	0	0
2015	12 2	2	1	19 2	4	1
2016	10 2	2	7	12 2	2	0
合計	109 14	18	31	114 20	25 2	6

国際交流センター運営会議 (2017c) : 「ナンヤン理工学院との交流実績」 (2)、2017 年 3 月 31 日. をもとに作成

学生研修は、1～3 年次学生対象の看護研修に参加した学生数を示す。

看護実習は、4 年次生が 9 月に実施する国際看護実習に参加した学生数である。引率・教職員派遣には他学部所属の教員数も含まれる。

含まれる。

(3) NYP 学生の本学での研修内容

NYP のヘルスサイエンス学部看護学科生が 2016 年度に本学で実施した主要な研修内容は、以下の通りである (2017a)。

NYP 学生は、本学において「日本の保険と保健医療制度」、「日本の教育制度・教育課程」の講義を受講した。また、NYP 学生はエンゼルケアの看護演習を行い、聖隷三方原病院、浜松市リハビリテーション病院、おおぞら療育センター、ゆうゆうの里でシャドーイング及び施設見学を実施した。

スケジュール

1 日目	中部国際空港着
2 日目	ホストファミリーと過ごす
3 日目	オリエンテーション、 講義：「日本の保険と保健医療制度」、 歓迎昼食会、キャンパスツアー
4 日目	講義：「日本の教育制度・教育課程」 施設見学：おおぞら療育センター、 ゆうゆうの里
5 日目	看護学演習：エンゼルケア、 施設見学：聖隷三方原病院、 日本文化体験：茶道
6 日目	施設見学：浜松市リハビリテーション 病院（摂食嚥下介助講義、病院 見学、ベットサイドケア見学）
7 日目	意見交換会、修了式、フェアウェル パーティー
8 日目	観光：浜松城、龍潭寺など
9 日目	中部国際空港発

(4) NYP 学生の国際看護実習内容

NYP のヘルスサイエンス学部看護学科 3 年次生 2 名は、毎年度 9 月に 4 週間の国際看護実習を行っている (2011 年度は中止された)。実習では、日本の看護教育制度や医療制度に関する講義のほか、本学の実習病院でもある聖隷浜松病院、聖隷三方原病院、おおぞら療育センター、浜名湖エデンの園、訪問看護ステーションにおけるシャドーイング実習、健康診断センターの見学を行っている。

3. SMU との交流事業

1) 学生及び教職員の派遣者数の推移

2013 年 11 月の交流協定の締結後、SMU と本学の看護学部生の間では毎年度交流活動が実施されてきた。両校が互いに派遣した学生と教職員数の推移は表 3 の通りである。

2) 2016 年度の学生研修の内容

本学と SMU は 2014 年度より、協定校を拠点として看護研修を実施してきた。2016 年度に実施された主な研修内容は以下の通りである (2017e)。

(1) 本学部生の SMU での研修内容

本学部生は、SMU において「アメリカのヘルスケアシステムにおける看護師の役割」、「アメリカのヘルスケア」の講義を受講した。また、学部生は、「シミュレーションラボ（静脈内注射、IV ポンプ、筋肉内注射）」、「シミュレーションラボ（循環器のアセスメント）」の看護演習を行い、ジョージマーク子ども病院（小児ホスピス）、ジョンミュラー・コンコード病院、セント・メアリーズセンター（支援施設）、セント・ポールタワー（高齢者施設）においてシャドーイング及び施設見学を実施した。特に、SMU における「シミュレーションラボ」の看護演習 (図 1) では、本学と SMU の教員間で共同研究を進めている「シミュレーション看護教育」を重点的に実践した。

表 3. 本学と SMU の学生・教職員派遣数 (名)

年度	本学から SMU への派遣			SMU から本学への派遣		
	学生研修	引率	教職員派遣	学生研修	引率	教職員派遣
2013						6
2014	4	1	5	9	3	0
2015	10	2	2	10	3	0
2016	10	2	2	10	2	2
合計	24	5	9	29	8	8

国際交流センター運営会議 (2017d) : サミュエルメリット大学との聖隷クリストファー大学との交流実績、2017年2月20日。をもとに作成

引率は学生研修の引率を担当した教職員数を示し、教職員派遣は本人の研修のために派遣された教職員数を示す。学生研修は看護学部生のみ参加者数を示すが、引率と教職員派遣は他学部の教員数も含む。



図 1. 本学部生の SMU におけるシミュレーション演習

スケジュール

1 日目	サンフランシスコ国際空港着
2 日目	オリエンテーション、キャンパスツアー、 講義：「アメリカのヘルスケアシステムにおける看護師の役割」、歓迎パーティー
3 日目	演習：シミュレーションラボ (静脈内注射、IVポンプ、筋肉内注射)、 演習：シミュレーションラボ (循環

	器のアセスメント)、 オリエンテーション、 講義：「日本の保険と保健医療制度」、歓迎昼食会、キャンパスツアー
4 日目	施設見学：ジョージマーク子ども病院 (小児ホスピス)、 講義：「アメリカのヘルスケア」
5 日目	演習：「アメリカのヘルスケア」 SMU 学生の臨床経験について、 サンフランシスコ観光
6 日目	サンフランシスコ観光、ホストファミリーと対面
7 日目	ホストファミリーと過ごす
8 日目	施設見学・シャドーイング：ジョンミュラー・コンコード病院
9 日目	施設見学：セント・メアリーズセンター (支援施設)、セント・ポルタワー (高齢者施設)、 フェアウェルパーティー
10 日目	サンフランシスコ国際空港発

(2) SMU 学生の本学での研修内容

SMU 学生が本学を拠点に行った研修内容は、以下の通りである（聖隷クリストファー大学、2017a）。SMU 学生は、本学で「日本の保健医療福祉制度と看護教育制度」と「高齢者介護福祉制度の概説」の講義を受講し、「エンゼルケア」、「フットケア」の看護学演習を実施する。講義や演習の間には、聖隷三方原病院の災害対策やホスピス見学、訪問看護ステーション三方原・細江、和合せいれいの里でのシャドーイングおよび施設見学も実施している（2017 a）。

スケジュール

1 日目	成田国際空港→浜松到着
2 日目	本学オリエンテーション、キャンパスツアー
3 日目	講義：「日本の保健医療福祉制度と看護教育制度」、 施設見学：おおぞら療育センター、 本学の防災対策・設備の説明、 本学の授業見学／歓迎夕食会
4 日目	講義：「高齢者介護福祉制度の概説」、 高齢者疑似体験「看護援助論演習」、 本学部生との交流会、 SMU の教員による講義：「シミュレーション看護」について
5 日目	聖隷三方原病院において、災害対策とホスピス見学
6 日目	施設見学：訪問看護ステーション三方原・細江、 和合せいれいの里、 母性看護実習：フットケア演習、 高齢者の介護・看護：聖隷デイサービスセンター三方原見学
7 日目	ホストファミリーと観光など

8 日目	全員で観光
9 日目	看護学演習：エンゼルケア、 学生との意見交換会・修了式
10 日目	成田国際空港発

IV. まとめと今後の課題

ここまで本学の交流協定校との協定締結までの経緯と、締結後の看護学部の交流事業を振り返ってきた。本学は、2004 年に TMMU との間で初めて交流協定を締結してから 13 年間に NYP、SMU、カトリック・サンジ大学と 4 校に協定校を増やした。大学による協定締結後に看護学部は、総じて学生 208 名と教職員 101 名を研修、研究交流および引率の目的で派遣してきた。また協定校からも学生 171 名と教職員 102 名を受け入れてきている。

本学の看護学部からの派遣学生数については、NYP が 123 名で最も多く、次に TMMU の 61 名、SMU が 24 名である。また教職員の派遣者数の上でも NYP が 49 名で、TMMU の 38 名、SMU の 14 名を上回っている。

また協定校からの本学部への学生受け入れ数についても、NYP が 134 名で最も多く、SMU が 29 名、TMMU が 8 名となっている。教職員の受け入れ数は、TMMU が 53 名で最も多く、NYP が 31 名、SMU は 16 名である。特に、NYP を拠点としたシンガポール研修は、2006 年度から 2011 年度までは看護学部からの参加学生は 5 ～ 11 名であったが、2014 年以降は毎年度定員 20 名を上回る応募があり、選考を実施しなくてはならないほどの人気を集めており、2014 ～ 2016 年度には看護学部から 10 ～ 12 名を派遣している。

さらに、協定校との間で実施する研修プログ

ラムは、本学部も含めてすべての協定校が学内での体験授業、各種の看護演習を実施しているほか、医療施設の見学、学生同士の交流活動を主体とする教育内容を展開している。それらは、協定校の学生・教職員と互いの看護に関する知識・技術、教育方法、研究内容を共有しあうものとなっており、本学と協定校が研修内容を通じて、文部科学省が「グローバル化に対応した教育環境づくり」として提唱する「大学・学部の特色・方針や教育研究分野を活かした教育」を実践していることが確認される。

これまで述べてきたように、本学の看護学部が13年間協定校との間で学生研修と教職員の研究交流を実施してきたことは大きな成果といえる。しかし、海外渡航の安全性や教員の負担等考慮した運営を目指す上ではさらなる改善が求められる。今年度、グローバル教育推進運営委員会看護学部構成委員は今後の協定校との交流活動の課題を整理した。主な課題は以下の通りである (2017f)。

1. 危機管理の問題

- 1) 感染対策としての事前の予防接種の実施
- 2) 引率者の危機管理対応と体制
- 3) 引率教員の人数配置の問題

2. カリキュラムに関連した問題

- 1) アメリカ看護研修の単位化の問題
- 2) 研修受け入れ時期の検討
- 3) 学生の研修内容の点検・フィードバックの必要性について

3. 組織的な問題

- 1) 引率者の通信手段と経費の問題
- 2) 研修先への謝礼等の必要性について
- 3) 受け入れ時のもてなしの費用の問題

1-1) の感染対策としての予防接種の実施については、SMUを拠点とする「アメリカ看護

研修」ではシャドーイング実習を行う病院からワクチン接種を求められており、学生の経済的・精神的負担が問題となってきた。しかし、カリフォルニア州の基準が厳しいため、今後は参加学生・教員に7項目のワクチン接種を義務づけるものとした (2017h)。

1-2) の引率教員の危機管理対応と体制については、グローバル教育推進センター運営会議看護学部構成教員とグローバル教育推進センターとの間で課題を共有する中で、引率教員が十分に大学の定める危機管理マニュアルを把握していない (学生が自分の所有物を紛失した際は、学生自身が日本国内の保険会社に連絡し対処すること) ために生じた困難もあったことが確認された。今後は、国際交流に関わる教職員の交代時の危機管理対応の着実な引き継ぎや、引率教員への丁寧な説明が必要であるとの認識が構成教員とセンター職員の間で共有できた。このことは、危機管理の問題解決に向けた第一歩となり得たと考えられる (2017g)。

1-3) の引率教員の人数配置については、5～15名の学生を引率教員1名、16名以上を教員2名で対応している現行の体制では事故発生時に対応が困難であることから、引率を経験した教員の間からは、学生が10名以上の場合には2名の教員を配置して欲しいという内規見直しの希望が提出されている (2017h)。

2. カリキュラムの問題については、現在サミュエルメリット大学での「アメリカ看護研修」は本学で「国際看護論 (1単位)」として読み替えて単位化しているが、現地での研修内容や学生の負担から「アメリカ看護研修」の単位化が望ましいとする意見が提出されている (2017f)。

2-2) 「研修受け入れ時期の検討」に関しては、本学の正課が動いている時期の研修の受け

入れは教員・施設の日程確保が困難であること、特に看護学部の臨地実習期間は教員のプログラム参加が困難であることなどの問題が指摘されている。

3-1) ~ 3) の活動経費に関連する問題については、大学の予算化が希望されているが、現在グローバル教育推進センター運営会議で検討中である。

今後の交流協定校との交流のあり方については、現在全学的な「グローバル人材育成プロジェクト」の下で改革案が検討されている。今後、これらの課題が当新規事業内で解決されていくことを期待する。この13年間、協定校との間で大きな事件・事故が起こることなく交流活動が継続されてきたことに感謝しつつ、本報告の結びとしたい。

引用文献

文部科学省 (2013年) : 中央教育審議会 (大学のグローバル化に関するワーキンググループ 第1回資料5 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等)、最終アクセス 2017年12月15日、URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryo/attach/1338083.htm

参考文献

国際交流センター運営会議 (2003) : 国際交流センター運営委員会議事録、2003年10月2日。
国際交流センター運営会議 (2004) : 「2004年度活動概要と評価、課題提案について」、2004年12月7日。
国際交流センター運営会議 (2005) : 国際交流センター運営会議事録、2005年9月15日。

国際交流センター運営会議 (2006) : 第三軍医大学・西南医院との交流実績と今後、国際交流運営委員会、2006年9月25日。

国際交流センター運営会議 (2011) : Samuel Merritt University (SMU) : Fusae Kondo Abbott 博士との意見交換 (記録)、2011年11月15日。

国際交流センター運営会議 (2013) : Memorandum of Understanding 交流協定に関する覚書案 対訳、2013年11月5日。

国際交流センター運営会議 (2017a) : 国際交流センター運営会議配布資料 2016年度 第10回、2017年2月7日、p. 21、p. 24。

国際交流センター運営会議 (2017b) : 第三軍医大学と聖隷クリストファー大学との交流実績、2017年2月20日。

国際交流センター運営会議 (2017c) : ナンヤン理工学院との交流実績」(2)、2017年3月31日。

国際交流センター運営会議 (2017d) : サミュエルメリット大学との聖隷クリストファー大学との交流実績、2017年2月20日。

グローバル教育推進センター運営会議 (2017e) : 国際交流ガイドブック、2017~2018年度版。
グローバル教育推進センター運営会議 (2017f) : 国際交流 (海外研修・国際看護実習) に関わる困難と課題、看護学部構成員、2017年5月26日。

グローバル教育推進センター運営会議 (2017g) : 国際交流に関わる困難と課題、看護学部構成員、2017年11月24日。

グローバル教育推進センター運営会議 (2017h) : 国際交流に関わる困難と課題、看護学部構成員、2017年12月22日。

グローバル教育推進センター運営会議 (2017i) : 聖隷クリストファー大学の海外研修における教職員派遣者一覧表、2017年11月30日。